

早いもので平成26年度の本研究会の活動がまもなく終わろうとしています。校務で忙しい中であって今年度の事業を無事閉じることができたことを嬉しく思います。

秋の研究発表会では階上小学校 工藤和宏 教諭がタブレットを使用しながら、5・6学年体育「台上前転」の授業を公開しました。授業者をはじめ、懇切丁寧な指導助言を頂いた三八教育事務所主任社会教育主事・鈴木稔先生、研究協議の司会・記録にあたっていた先生方、当日の準備や運営にご尽力くださった事務局の先生方、そして、研究会場を提供して頂いた校長先生初め諸先生方に改めて感謝と敬意を表します。

さて、今年度秋田県教育委員会主催の「学力向上フォーラム」（由利本荘市）に参加してきました。秋田県はご存じのように全国学力テストで常にNO1の県です。行政時代、その秘密を文字や耳ではうかがっていたものの、実際に視察・研修するのは今回が初めてでした。わずか1日の訪問でしたが明らかに2つの違いに気づきました。それは、

- 1 全学年・全学級で電子黒板をはじめとするICT機器を使用していた事
- 2 TTにおいてT1・T2の役割を固定することなく、両者が臨機応変に主従を担っていた事

でした。

ここで改めて平成26年9月に発表された文科省「平成25年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」を参照すると、「デジタル教科書の整備状況」において本県（25.9% 37位）は秋田県（24.4% 40位）を僅かに上回っているものの、他の整備状況と教員の活用指導力のすべての項目において水をあけられている状況です。特に差が大きい項目が「電子黒板のある学校の割合」で、秋田81.9%（12位）に対して青森55.1%（46位）となっています。

青森県の「教員の活用指導力」は5項目において42位、44位、36位、45位、45位と全国47都道府県の中で低空飛行を続けています。その原因の1つは教育現場にICT機器が行き渡っていないことがあげられるでしょう。「ない」から使えず、教員の活用能力も伸びません。それでも全国学力テストで本県が上位にいるのは、プリントを徹底的に繰り返したり問題解決的、体験的な学習の展開を工夫する教員の努力の結果と言えます。

ICT機器は課題を共有したり考えを深めまとめるツールです。このツールと私たち教員の真摯な取組が手を組んだ時、その時こそさらにより結果が訪れるものと信じています。今までこれで良かったから続けるのか、世界や日本の状況を見て変革するのか……。NHK大河ドラマ「花燃ゆ」のように、鎖国の中で幕藩体制を維持しようとする徳川幕府と外国の技術を取り入れて国際力をつけようとする薩長土肥のぶつかり合いが、今現実に教育現場にもあるように思えます。

会員のみなさん。備品要望の際は1台でも多くICT機器を要求していくこと、校内研究や議員訪問の授業等で活用しその良さを感得してもらうこと、このような地道な取組を今後とも続けていくことが大切です。皆さんのますますのご活躍を祈念し、平成26年度研究集録の巻頭言といたします。